



登録番号/ Accession No.	品名/Title	時代/Date	法量 /Size(cm)	窯/Kiln	備考/Note	
00787	青花 蓮池鴛鴦文 鉢 せいか れんちえんおうもん はち	元時代・14世紀	h:13.8	景德鎮窯	住友グループ寄贈(安宅コレクション)	
	BOWL Blue-and-white with design of mandarin ducks in a lotus pond	Yuan dynasty, 14th century	d:29.8	Jingdezhen ware	Gift of SUMITOMO Group(The ATAKA Collection)	
元時代の青花磁器は、誕生後急速に技術を確立したと考えられています。西アジア向けの交易品が生産の中心で、当地の習慣にあわせた大型の壺や盤、瓶などの器形が作られたことが知られています。顔料には「回青(かいせい)」と呼ばれる西アジアからの輸入コバルトが用いられ、器表全面にいくつかの区画を設けて余白をほとんど残さない文様構成も、西アジアの金属器などと共通します。本器では珍しく内壁に大きく白地帯が設けられ、他の作品とは印象が異なるものとなっています。この白地部分によって、文様の藍色はより一層鮮やかに引き立ち、大きな円圏が池そのものようにも感じられます。蓮池に泳ぐ鴛鴦の図は、夫婦円満と子孫繁栄の吉祥の意味を表します。底部は全面露胎で、高台内壁に砂粒が付着しています。						
00828	青花 牡丹文 輪花盤 せいか ぼたんもん りんかばん	明時代・永楽(1403-1424)	h:2.4	景德鎮窯	住友グループ寄贈(安宅コレクション)	
	DISH Blue-and-white with peony design	Ming dynasty, Yongle period (1403-1424)	d:19.5	Jingdezhen ware	Gift of SUMITOMO Group(The ATAKA Collection)	
明時代初頭の洪武年間には、海上の交通や交易を禁ずる「海禁令」によりコバルトの輸入が途絶え、青花の生産は一時減少しました。その後、永楽年間になると海外との交易が奨励され、「蘇麻離青(そまりせい)」と呼ばれる西アジア産のコバルト顔料の入手が可能となったことにより、再び青花の生産が盛んとなりました。永楽期に特有の、「甜白(てんぱく)」と呼ばれるきめの細かい優美な白磁に描かれた文様は、青みの強いやや滲んだ発色が特徴で、元青花に比べて余白を多くとり、絵画風に描かれるようになっていきます。稜花形につくったこのような盤は、元時代にも見られる器形で祖型は金属製品に求められますが、小型で薄作りであることや、線描きを多用した折枝文の流麗な絵付けから、前時代のものに比べて瀟灑な印象です。高台は小さく削り、全面を露胎としています。						
00757	青花 花果文 鉢 (「大明宣徳年製」銘) せいか かかもん はち	明時代・宣徳(1426-1435)	h:7.6	景德鎮窯	住友グループ寄贈(安宅コレクション)	
	BOWL Blue-and-white with flower and fruit design	Ming dynasty, Xuande mark and period (1426-1435)	d:22.4	Jingdezhen ware	Gift of SUMITOMO Group(The ATAKA Collection)	
宣徳年間には、官窯の制度が確立したと考えられ、器物に年款名を記すことが始まりました。硬質な美しさを備えた純白の白磁胎に描かれた青花文様は、優美でさらに洗練されたものとなりました。ここでは、鉢の側面の内外ともに、葡萄、荔枝(れいし)などの果実と、牡丹、宝相華、庚申薔薇(こうしんばら)などの花を折枝風に描いています。このような折枝文は元時代には見られず、明時代に始まったものです。文様の取り合わせや配置などは鉢の内外で少しずつ異なり、六輪花の形にも対応していません。しかし、それがかえっておおらかでゆったりとした明初特有の気分を感じさせます。一方で、器表を圏線で区切って文様帯を設けるとい、元時代の意匠の名残もあわせ持ったものです。高台内に二重円圏の「大明宣徳年製」銘が描かれます。						
00774	青花 牡丹唐草文 瓶 (「大明嘉靖年製」銘) せいか ぼたんからくさもん へい	明時代・嘉靖(1522-1566)	h: 31.8	景德鎮窯	住友グループ寄贈(安宅コレクション)	
	BOTTLE Blue-and-white with peony scroll design	Ming dynasty, Jiajing mark and period (1522-1566)	d:18.4	Jingdezhen ware	Gift of SUMITOMO Group(The ATAKA Collection)	
嘉靖年間は磁器の大量生産・消費の時代で、「官搭民焼制(かんとうみんしょうせい)」と呼ばれる民間による官窯製品の請負生産制度が始まりました。その結果、官民での技術と様式の交流がおこなわれ、官窯製品にもある意味での「ゆるさ」が見られます。器形からは精緻さが失われ、文様には量産に適した塗りつぶしが多用されていきます。この時期の顔料は、西アジア産の「回青(かいせい)」と呼ばれるコバルトを用いたもので、濃く鮮やかな色調が、手慣れた筆致で描かれた文様によく調和しています。本器は、大振りの器形、全面に表わされた繁縷ともいえる文様、鮮やかなコバルト顔料の発色など、嘉靖期の青花の特徴がよく現われた作例です。器表を区切る蓮弁や花文なども従来見られなかった形態で、この時期に多用されたものです。						
02132	青花 騎馬人物文 皿(古染付) せいか きばじんぶつもん さら	明時代・17世紀	h:6.4	景德鎮窯	堀尾幹雄氏寄贈	
	DISH Blue-and-white with mounted warrior design (Kosometsuke style)	Ming dynasty, 17th century	d:29.8	Jingdezhen ware	Gift of Mr. HORIO Mikio	
明時代末の17世紀には、厚作りの器体に手慣れた筆致の雅趣あふれる文様が描かれた皿や鉢などが生産され、日本へ多数もたらされました。それらは「古染付(こそめつけ)」の名で知られ、一部には型ものの皿、鉢など、日本からの注文生産による例もあります。本器の題材の騎馬人物図は、明時代に流行した『水滸伝』や『三国志演義』などの挿絵付きの時代小説の一場面と思われれます。従来の文様配置の型にとらわれず、皿の内面全てを使い、いかにも民窯らしい自由闊達なびのびとした絵付けです。山水の構図や表現は初期伊万里の大皿にも通じるものがあります。外側口縁部には、二箇所に大きく草花文を描き、全面施釉して畳付のみを削って露胎としています。口縁部には、古染付に特有の「虫喰い」と呼ばれる小さな釉の欠損が生じています。						
02101	青花 花鳥文 盤(呉須染付) せいか かつようもん ばん	明時代・17世紀	h:10.1	漳州窯	入江正信氏寄贈	
	DISH Blue-and-white with bird and flower design (Gosumetsuke type)	Ming dynasty, 17th century	d:46.6	Zhangzhou ware	Gift of Mr. IRIYE Masanobu	
福建省の漳州窯では、16世紀後半から17世紀に、景德鎮窯の青花磁器を模した粗製品が生産されました。灰白色の素地に白釉をかけて下地とし、呉須(コバルト顔料)で施文後、透明釉をかけ焼成したものです。一般に呉須の発色は暗めですが、厚作りの器体に力強いおおらかな文様が描かれ、景德鎮の青花磁器とは異なる魅力があります。貿易陶磁として各地に大量にもたらされ、日本では「呉須染付」と、欧米では「スワトウ・ウェア(Swatow Ware)」と呼んできました。本器も景德鎮の芙蓉手(ふようで)盤を模したものです。文様は原型が定かでないほど簡略化した部分もありますが、寿石や霊芝風のものが見られることから、吉祥の意味をもつ図柄と思われれます。全面施釉して畳付を削って露胎とし、周囲に砂粒が付着しています。						
00613	青花 四君子文 八角瓶 せいか しくんしもん はっかくへい	黎朝・15世紀	h:28.5		住友グループ寄贈(安宅コレクション)	
	BEVELED BOTTLE Blue-and-white with design of symbols of the Four Nobles	Le dynasty, 15th century	d:14.0		Gift of SUMITOMO Group(The ATAKA Collection)	

<p>ベトナムでは、14世紀中ごろに青花の焼成が始まったと考えられます。見込みに簡単な草花文を描いた鉢や盤が中心で、文様は灰色から黒色に近い発色です。それらとは別に景德鎮窯の青花に類似した盤や瓶があり、大和8年(1450)銘の瓶(トプカプ宮殿)を基準に、15～16世紀に編年されています。生産地としては、北部のバッチャン窯やチューダオ窯などが知られています。本器もその一例で、ラッパ形に開いた口部と細い頸、丸い胴をもつ「玉壺春(ぎよっこしゅん)」という元時代の瓶を祖型としています。器面を四つの文様帯にわけ、上から蕉葉文、宝相華文、松、蘭、梅、竹の四君子文、蓮弁文を描きます。描線は精緻でコバルト顔料の発色も濃く鮮やか、頸から胴へのラインが見事な曲線を描き、ベトナム青花の玉壺春形瓶の中でも優れた作行を見せるものです。</p>						
00639	青花 宝相華唐草文 瓶 せいか ほうそうげからくさもん へい	黎朝・15世紀	h:26.2		住友グループ寄贈(安宅コレクション)	
	BOTTLE Blue-and-white with <i>baoxiang-hua</i> scrolls design	Le dynasty, 15th century	d:13.0		Gift of SUMITOMO Group(The ATAKA Collection)	
<p>青花四君子文瓶に比べて頸部がやや太く、重心が高めなため、ほっそりとした形です。頸と裾の部分で器表を区切り、胴部に三つの宝相華を配して唐草でつなぎ、背景を塗りつぶします。コバルト顔料の明るい紺色が、白抜き文様を際立たせ、唐草の蔓と葉が軽やかに続いていきます。ベトナムの青花は、夾雑物(きょうざつぶつ)を含んだ淡灰色の半磁胎に丁寧に白化粧をし、その上にコバルト顔料で絵付けをして施釉、焼成したものです。そのため、ここで見る白地も胎土ではなく、白化粧土の色です。胴裾に配された蓮弁文の内部には、特徴のある渦文が描かれることも中国青花とは異なります。高台は畳付を削って露胎とし、内側には全面に鉄泥が塗られています。「チョコレートボトム」とも呼ばれ、露胎の高台内の保護などの説がありますが、定かではありません。</p>						
00609	青花 双鳥文 盤 せいか そうちようもん ばん	黎朝・15世紀	h:10.2		住友グループ寄贈(安宅コレクション)	
	PLATE Blue-and-white with pair of birds design	Le dynasty, 15th century	d:41.2		Gift of SUMITOMO Group(The ATAKA Collection)	
<p>器形、コバルトの発色、釉調など優れた作行を見せる大形盤で、双鳥文の構図、内壁に廻らせる宝相華唐草文などは、中国の青花磁器を想起させます。一方、精悍で生命力にあふれた鳥の表情や、蔓をとぎれとぎれに描く様式化した唐草文など、細部の表現はベトナム青花独自の要素です。見込みの余白を埋める草も、本来は魚藻文に描かれる水草で、鳥に水草という組み合わせもベトナム流のアレンジでしょう。外側面には独特の雲文で飾られる蓮弁文が描かれますが、配置が均等ではなく、一つ小さな蓮弁をはめ込んで帳尻合わせをしています。その蓮弁の内部だけを渦文とするなど、おおらかな“臨機応変さ”です。口縁部と畳付の双方を削って露胎とする処理も中国青花とは異なっています。高台内には釉を粗くふき取り、四箇所目跡らしきものが認められます。</p>						
01191	青花 鳳凰文 盤 せいか ほうおうもん ばん	黎朝・15世紀	h:7.6		矢橋重雄氏寄贈	
	PLATE Blue-and-white with phoenix design	Le dynasty, 15th century	d:38.0		Gift of Mr.YABASHI Shigeo	
<p>盤の見込みに花をくわえた鳳凰の鳥を一羽描き、周囲に如意頭雲を配します。内壁には牡丹唐草が廻らされますが、花の形は簡略化され、見込みの雲と見分けがつきません。描線は太く、手早く簡略化した描法は、四君子文瓶や双鳥文盤の緻密さとは異なるものです。コバルトの発色も黒味が強く、釉にも若干黄味が見られます。外側面には、内部に渦文を描いた蓮弁文が描かれていますが、本作品では、幸いほぼ同サイズの蓮弁が均等に配置されています。高台内には鉄泥が塗られていますが、塗り方が均一ではなかった結果、表面調整の筈跡が観察できることとなりました。</p>						
01190	青花 牡丹宝相華唐草文 蓋物 せいか ぼたんほうそうげからくさもん ふたもの	黎朝・15世紀	h:30.8		矢橋重雄氏寄贈	
	COVERED BOWL Blue-and-white with peony and <i>baoxiang-hua</i> scrolls design	Le dynasty, 15th century	d:27.5		Gift of Mr.YABASHI Shigeo	
<p>本器は、器形、文様表現などの点でベトナム的な要素がさらに顕著な例です。蓋付きの大形深鉢を基本形として高台の四箇所胎土を足して角形の台付としたものです。その祖型は、インドシナ半島で特有の、籠や漆製の容器にあると思われます。白化粧を全面に施し、蓋と身いずれにも“ベトナム的”牡丹と宝相華を交互に配し、“つながらない”唐草で結びます。唐草に添えられる葉は、蓋では牡丹の、身では宝相華のものとなるなど、自由さが随所に見られます。口部は合口づくりとなっており、蓋と身は決まった場所でのみ一致します。口部に描かれた渦文は、その合わせ印の意味をもつ、装飾を兼ねた実用的なものです。口のあわせ部分のみ露胎として、内面は蓋、身ともに全面施釉。器底部は畳付を露胎として高台内には渦状に釉が残っています。</p>						
00584	青花 梅竹文 壺 (「辛丑」銘) せいか うめたけもん つぼ	朝鮮時代・15-16世紀	h:31.3	広州官窯	住友グループ寄贈(安宅コレクション)	
	JAR Blue-and-white with plum tree and bamboo design	Joseon dynasty, 15th-16th century	d:29.8	Gwanju official kiln	Gift of SUMITOMO Group(The ATAKA Collection)	
<p>朝鮮半島での青花の焼成は、朝鮮時代の15世紀中ごろに京畿道広州官窯で始まったと考えられます。当初、輸入のコバルト顔料が非常に貴重であったため、青花の絵付けは都の漢城から派遣された宮廷画家が行ったと記録にあります。本作品も、胴に大きく表わされた梅樹と竹の巧みな構図と精緻な表現が、画員による絵付けを想起させます。肩と胴裾に如意頭と蓮弁文を廻らせるという文様構成自体は、中国青花を踏襲するものですが、細部の描き方には、固有の特徴が見られます。特に如意頭文は、朝鮮時代を通して従文様として描かれていくモチーフです。底部は高台内の一部に釉の流れ込みがあり畳付は露胎、高台内には「辛丑」銘が残り、1481年の可能性が考えられます。類似した陶片が、京畿道広州市樊川里(はんせんり)9号窯址から出土しています。</p>						
00508	青花 松鳥文 壺 せいか まつとりもん つぼ	朝鮮時代・15-16世紀	h:27.3	広州官窯	住友グループ寄贈(安宅コレクション)	
	JAR Blue-and-white with birds and pine tree design	Joseon dynasty, 15th-16th century	d:26.0	Gwanju official kiln	Gift of SUMITOMO Group(The ATAKA Collection)	
<p>玉縁の口縁と強く張った肩は、朝鮮時代15～16世紀の壺の持つ特徴です。器表には従属文を配さず、一面には松樹と一對の鳥を、もう一面には梅樹と一羽の鳥を描きます。余白をたっぷりとした配置や精緻な筆致は、同時期の花鳥図に通じるところがあり、宮廷画員の筆によるものと思われます。小鳥や松葉、梅花が透明度の高い鮮やかな青色に、幹の部分が濃い灰色に発色しているのは、使用した顔料の違いがあるためと考えられます。純度の高いコバルト顔料は「回青」と呼ばれ、中国から輸入された貴重品でした。一方、世祖10年(1464)に朝鮮半島でも回青に似た顔料が発見され、青花を焼成したとの記録もあり、国産の顔料を用いた生産も試みられています。この壺は二種のコバルト顔料を効果的に使用した例と思われます。</p>						

01319	青花 双鳳文 盤 せいか そうほうもん ばん	朝鮮時代・17世紀	h:5.8	広州官窯	李秉昌氏寄贈	
	DISH Blue-and-white with design of paired phoenixes	Joseon dynasty, 17th century	d:29.8	Gwanju official kiln	Gift of Dr. RHEE Byung-Chang	
やや内湾する盤の見込みに円圏を設け、双鳳文と雲文を描いたものです。胎土は夾雑物が多く、コバルトの発色は黒味が強く、透明釉も黄みを帯びています。文様の構図はベトナム青花の双鳥文盤と共通ですが、様式化された謹直な鳥の姿から受ける印象は全く異なったものです。16世紀末から約50年間、朝鮮王朝では周辺国からの度重なる侵略という国難が続き、陶磁器生産も大きな打撃を受けました。光海君10年(1618)には、王室の宴礼に用いる青花磁器がなく、“仮画”(白磁に仮に絵を描いたもの)を用いたとの記録なども見られます。17世紀の広州官窯の実態は、1980年代に行われた窯址調査で研究が進みましたが、青花については発見例が少なく作例も多くはありません。本器は、器形や胎土、釉調、文様などから、数少ない17世紀の青花作品と考えられます。						
00430	青花 龍文 壺 せいか りゅうもん つぼ	朝鮮時代・17-18世紀	h:34.5	広州官窯	住友グループ寄贈(安宅コレクション)	
	JAR Blue-and-white with dragon design	Joseon dynasty, 17th-18th century	d:32.2	Gwanju official kiln	Gift of SUMITOMO Group(The ATAKA Collection)	
火炎宝珠を追う、四爪の龍を全面に描いた壺で、いわゆる「龍樽(りゅうそん)」と呼ばれるものです。鱗や体毛を一筆ずつ丁寧に描いた龍の姿が、いかにも王室の宴礼用の器という謹厳さを醸し出しています。周囲に配した霊芝雲や火炎宝珠の形は、明時代初期の表現に通じます。頸、肩、胴裾に従文様帯を設けそれぞれ蔓唐草、ラマ式蓮弁、二重蓮弁を丁寧に描きこんでいます。「辛丑」銘梅竹文壺と共通の文様構成ですが、コバルトの発色はこの時期の青花に特有の淡くやや暗い色調です。口部は、内側を一段削り落として受け口につくり、本来は蓋をとまっていたと思われます。底部は全面施釉して高台内をふきとり、畳付のみ露胎となっています。						
01384	青花 窓絵草花文 面取壺 せいか まどえそうかもん めんとりつぼ	朝鮮時代・18世紀前半	h:24.7	広州官窯	安宅昭弥氏寄贈	
	BEVELED JAR Blue-and-white with floral plants design	Joseon dynasty, first half of the 18th century	d:26.3	Gwanju official kiln	Gift of Mr.ATAKA Teruya	
18世紀前半には京畿道広州郡金沙里(きんさり)に官窯が置かれ、独特の乳白色の素地に淡青色の楚々とした植物文が描かれた、朝鮮独自の様式が確立されました。この種の青花は、日本では特に「秋草手」と呼ばれて愛好されてきました。本器は、朝鮮工芸の研究で知られる浅川巧(あさかわたくみ)旧蔵の、秋草手屈指の名作として知られている面取壺です。豊かに丸く張った器形、乳白色で潤いのある白磁胎、清楚で美しい文様と、どれをとっても見るものを魅了します。壺の胴と高台を大きく八つに削り落とした面取は、幅が均一ではなく不揃いですが、かえって篋使いの勢いが感じられ、陶工の技量がうかがえます。胴の中央に二面ずつ大きな木瓜型の窓を設け、手慣れた没骨法で仙人草、撫子、よめな、蘭が描かれています。高台は、畳付のみ削って露胎とし、砂粒が付着しています。						
01314	青花 十長生文 瓶 せいか じゅっちょうせいもん へい	朝鮮時代・19世紀前半	h:25.2	広州官窯	李秉昌氏寄贈	
	BOTTLE Blue-and-white with longlived emblem design	Joseon dynasty, first half of the 19th century	d:12.5	Gwanju official kiln	Gift of Dr. RHEE Byung-Chang	
18世紀の後半以降、官窯は広州分院里に固定され、前期とは対照的な堅牢な磁胎に、様々な文様が濃くはっきりした青色で描かれた製品が多数作られました。特に19世紀には、清朝工芸の影響により、様々な吉祥文様が描かれたことが特徴です。ここに見られる十長生文もその一例です。十長生とは、日、水、松、鶴、亀、鹿、霊芝に、山、雲、月、石、竹からいずれか三つを加えたもので、不老長生を表す象徴です。長生とは中国の神仙思想に基くものですが、このように多数のモチーフを組み合わせて一つの世界観を表現することは、朝鮮独自の手法で、陶磁器だけでなく、絵画、染色などにも多用されました。細頸の瓶の器表下部に地平を表す圏線を廻らせ、全面ぐるりに文様を描いており、あたかも絵巻を見るようです。						
00492	青花 蓮池鷺文 段重 せいか れんちさぎもん だんじゅう	朝鮮時代・19世紀	h:21.0	広州官窯	住友グループ寄贈(安宅コレクション)	
	TIERED BOWL Blue-and-white with herons in the lotus pond	Joseon dynasty, 19th century	d:17.8	Gwanju official kiln	Gift of SUMITOMO Group(The ATAKA Collection)	
我が国の重箱に相当する容器で、19世紀の作例が多く残ります。携行も可能なように、漆、木、籠、金属など軽い材質で作ったものが主流であったと思われます。本器も蓋のつまみの形に金属器や籠などの原型の名残がうかがえます。文様は各段とも、木瓜型の窓内に蓮池に鷺の図、宝珠型の窓内に山水図を描いたものを交互に二つずつ配し、間を草花文で埋めています。文様構成が共通しているにも関わらず、描き方には精粗のばらつきがあり、それが味わいともいえるでしょうか。蓋にも、宝相華風の2種の花文が交互に配されます。厚く、頑丈に成型された器体は、いかにも実用品らしく、簡略化して描かれた文様からも、磁器類が大量に生産された時代の様子がうかがえます。器底は畳付を残して全面施釉、透明釉は青みをおび、青花の発色も明るい青色となっています。						
00658	青花 吉祥文 面取瓶 せいか きっしょうもん めんとりへい	朝鮮時代・19世紀	h:26.4	広州官窯	住友グループ寄贈(安宅コレクション)	
	BEVELED BOTTLE Blue-and-white with lucky emblem design	Joseon dynasty, 19th century	d:17.2	Gwanju official kiln	Gift of SUMITOMO Group(The ATAKA Collection)	
フラスコ型の瓶を八面に面取したのですが、厳密には、頸を六角、高台を八角とし、胴は丸い器形の四箇所をおさえて変型八角となっています。口縁の玉縁や、削り落としによる肩の突起は、祖型が金属器にあることを想起させます。頸付け根の蓮弁文も、座金(ざがね)飾りを写したものでしょう。頸にはほとんど施文をせず、対照的に胴の全面に大きく文様を配しています。本来、地文様として使われる菱形文の装飾を中央の大きな円圏の中に描き、羽を広げた蝙蝠と「壽福」字を組み合わせて瓔珞(ようらく)のように見せ、余白を飾っています。文様の意味合いでは後者が主体で、壽福を表す吉祥文様です。青花の発色はやや暗めで、釉は青みが強いという、19世紀の特徴をよく示しています。						
01402	染付 山水鷹文 大鉢(初期伊万里) そめつけ さんすいたかもん おおぼち	江戸時代・1630~40年代頃	h.9.5	有田窯		
	LARGE BOWL Blue-and-White with design of landscape with hawk (Early Imari style)	Edo period, c.1630-40s	d.40.2	Arita ware		

<p>日本の青花磁器の焼成は、17世紀初頭の肥前有田で、朝鮮半島の磁器焼成の技術に基づいて、当時人気のあった中国明末の青花磁器風のものをつくることから始まりました。本器に見られる小さめの砂目高台は朝鮮半島の磁器焼成技術の、鐔縁(つばぶち)を持つ大形の鉢は景德鎮青花磁器の、それぞれの影響を示し、17世紀中ごろの初期伊万里に特有のものです。内面には断崖に羽を休める一羽の鷹を中心に、土坡(どは)や山岳、雲のある風景が、簡略ながら力強い筆致で描かれています。鉄分が多い素地は灰白色となり、酸化焰焼成のため文様も黒ずんで発色していますが、それがかえって初期伊万里ならではの味わいとなっています。小さめの高台は、畳付を露胎とし、内部に一部釉が流れこんでいます。有田の山辺田窯でつくられたものと考えられます。</p>					
01224	染付 花実文 皿(初期伊万里) そめつけ かじつもん さら	江戸時代・1640年代頃	h:2.3	有田窯	
	DISH Blue-and-white with flower and fruit design (Early Imari style)	Edo period, c.1640s	d:26.4	Arita ware	
<p>鐔縁(つばぶち)と小さめの低い高台をもつ平皿で、朝鮮時代の平皿に類似しています。口縁部には櫛歯(くしば)文を廻らせ、見込みに大きくたわわに実をつけた花実文をのびやかに描きます。周囲を呉須で丁寧に塗りつぶして文様を白抜きとしています。植物の蔓などは、さらに呉須地の上に濃い色で書き加えるなど、呉須の濃淡を効果的に利用した手の込んだ文様表現を行っています。全面に施釉して、畳付のみ削って露胎となっています。高台周辺に細かな砂粒が付着しており、こちらも朝鮮の磁器焼成の技術的な影響を示しています。透明釉には、青みが強く現われています。17世紀前半の有田磁器は「初期伊万里」と呼ばれています。伊万里の名は伊万里港から製品が積み出されたことに由来します。</p>					
02192	染付 花籠文 皿(芙蓉手) そめつけ はなかごもん さら	江戸時代・1660～1670年代	h:6.7	有田窯	
	DISH Blue-and-white, Kraak style with flower basket design (Fuyode type)	Edo period, 1660-1670s	d:36.4	Arita ware	
<p>17世紀半ばの明末清初の戦乱により焼成が中断していた中国青花にかわるものとして、ヨーロッパ向け製品の生産を開始したことで、有田では急速に技術革新が進みました。当初は特に、ヨーロッパで人気のあった万暦年間(1573～1620)景德鎮窯産の皿類の意匠を写したものが大量につくられました。皿の見込み中央に大きく円窓を、内壁に八つの花弁状の窓をそれぞれ設けた文様構成が特徴で、日本では「芙蓉手(ふようで)」と呼ばれます。本器もその一例で、見込みには八角形の枠内に花籠文が描かれています。胎土の質や焼成技術の違いから、中国製品のように高台径の大きな皿類を焼成することが困難で、それを解決するために高台内に支え目を置いて焼成する工夫が行われました。</p>					